

「彦火々出見尊絵巻」 図像私註(一)

— 幼児・低学年児童の古典学習材として再構成するために —

古 田 雅 憲

The Visual Thinking Strategies for "The Emaki
of UMISACHI & YAMASACHI"

Masanori Furuta

【はじめに】

幼児・低学年児童の古典学習のために、明通寺蔵「彦火々出見尊絵巻」を「読み聞かせ」学習材として再構成する——それが小稿の目論見である。その意は、次期小学校学習指導要領に言う「伝統的な言語文化に関する事項」にかかる実践プログラムを開発する点にある。

同「事項」の趣旨は、論者なりの表現で言い換えるならば、「話す聞く古典・声にする古典」の学習活動を通じて「古典に親しむ」ことを達成しようとするところにある。

あえて言うが、「話す聞く古典・声にする古典」の教室風景が、「読書百遍、意自ずから」的な音読・暗誦活動の場としてイメージされるとすれば、それはやはり誤解というべきである。むしろ「読書百遍」の効用は大きいけれども、やはり「伝え合う力を高める」という国語科の大目標に従う古典教室である。古文・漢文をただやみくもに音読・暗誦すればよいというものではない。児童相互の「交流」を誘発する学習活動となるよう留意しなければならない。あくまでも児童相互の「交流」を活性化しながら、「内容の大体を知り」、その中で「音読すること」が求められている。

それを実現する上で、論者は、映像（古典絵画）を援用する学習材の開発が

ポイントになると考えている。およそ「話す・聞く」の言語活動・コミュニケーション活動に際して、映像の利用（「見る」）が効果的であることはもはや言うまでもないだろう*₁。「話す・聞く古典教室」の実践においても同様である*₂。そのような発想のもと、論者は、高学年児童を対象として、石山寺蔵「源氏物語画帖」を素材とする授業提案と授業実践とを行った。その眼目は、「源氏物語」の音読学習に「源氏絵」を活用する点である*₃。

論者の提案と実践では、学習者は「源氏絵を観察し、そこから自分なりに考え、話し、聞き、再び考える活動」を最初に行って内容の大体を捉え、その後「源氏物語の音読」を楽しむことによって、「古典の響きや表現の面白さを発見」しようとした。言い換えれば、まず「絵解き」を楽しみながら物語理解のスキーマを活性化し、次のそのスキーマを駆使して古文を音読することで、より多様で豊かな、しっかりと心と体に根ざした古典学習を実現しようとしたのである。

小稿では同様の発想に従って、明通寺蔵「彦火々出見尊絵巻」を「読み聞かせ」のための「古典絵本」として再構成する試みを提案し、以って幼児・低学年児童のための古典学習の実践案を示したい。

【彦火々出見尊絵巻の学習材化】

明通寺蔵「彦火々出見尊絵巻」の資料価値や書誌詳細については、諸賢の考証も多いので、改めてここに言うまでもない*₄。小稿にとっては、その絵巻が記紀にさかのぼる「海幸彦・山幸彦」の神話に題材を得た古典絵画として、質・量ともに秀でた一本である点が重要である。というのも、次期指導要領に言う「(ア) 昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること」を達成する学習活動を構想する上で、数多ある古絵巻のなかでも最も使い勝手の良い一本だからである。

その古絵巻を「児童の発達の段階や初めて古典を学習することを考慮し、易しく書き換えたもの」（指導要領解説）として学習材化しようというのである。そして、それを「活用して読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること」（同）を通じて、「児童が伝統的な言語文化としての古典に出会い、親しんでい

く始まり」(同)とし、併せて「国の始まりや形成過程、人の生き方や自然などについての古代からの人々のものの見方や考え方」(同)について話題にしようとするのである。

むろん「海幸彦・山幸彦」に題材を得た絵本は別に数多ある。たとえばポプラ社や BL 出版の絵本は特に秀逸美麗である*50。

が、「伝統的な言語文化」として古典に触れようとする折には、その「物語」と共に伝えられてきた「絵」もまた大切に取り扱われるのが良い。というのも、「伝統的な言語文化」としての古典は、絵と言葉の密接な相関関係の中で今日に伝えられてきたのだから。古典「文」学を中心とも見える「源氏物語」でさえ、「これほど絵とともに読まれてきた物語はない」などと評されもすることは、今さら改めて言うまでもないことだろう。小稿において、明通寺蔵「彦火々出見尊絵巻」全体を、幼児・低学年児童のための「読み聞かせ古典絵本」として再構成(リライト)しようとする所以である。



また上述のような「読み聞かせ古典絵本」を教具として準備することは、幼児教育にとってもきわめて重要である。それは特に「古典絵画」という「家庭ではなかなか触れない内容にも触れる」(幼稚園教育要領)よい契機であり、「教師や友達と共に様々な絵本や物語、紙芝居などに親しむ」(同)なかで、特に「古典物語の世界」という「自分の未知の世界に出会う」(同)ための入り口である。「幼児期においては、絵本や物語の世界に浸る体験が大切」(同)であることは言うまでもないが、その「世界」の範囲を「古典」を含めて広く意識することは、特に今後の「幼保小の連携」等の観点からも必要とされるだろう。

以下、明通寺蔵「彦火々出見尊絵巻」の主要場面について私に整理しながら、幼児・低学年児童の豊かな古典学習の素材として再構成(リライト)する試みを示したい*60。

【第一場面／巻一・第二紙（右半）の読み解き】

巻頭の詞書に続いて最初の場面が展開する（図版1）。物語の進展に不可欠という場面ではないが、読み聞かせ時には「物語の始まり」として大切にしなければならない。



<図版1/参考文献(12)による。以下同。>

場面中央，二人の人物が画面左方に向かって歩を進める。

一人は檜桶を頭上運搬する女性。単の着物を片肌脱ぎに着崩し，腰に褶を巻く。髪は後ろで一つにまとめて垂らす。いかにも「働き者のおかみさん」という体である。桶中には水がなみなみと汲まれている。水を汲んで「家に戻る路次」ということか。

その左側にはうない髪の子供。柄杓で水を運ぶ。右側の女性を振り返りつつ，いかにも「お手伝いに励む子供」という体である。

その「親子」と思しき両人の足下にはなだらかな土坡が続く。左右の松楓と組み合わせあって「フレーム」のように，両人の姿をクローズアップする。

描き添えられた萩の花や美しく紅葉している楓の様から「秋景」と知られる。また水汲みに勤しむ女性図ということから「早朝の景色」と見てよい。



以上のような画註を踏まえ、また詞書を参観しつつ、低学年児童および幼児のための「読み聞かせ古典絵本」として再構成（リライト）するわけである。もっともこの画面に対応するような詞書は失われているので、上述の画註から次のように構成してみた。

むかし むかしの おはなしです。

まつや もみじが うつくしい このむらで、ひとびとは きょうも しずかに くらしておりました。

おや、みずくみに きた おかあさんと、おてつだいを している かわいい こが いますね。

<はなしあってみよう>

※いまは はる なつ あき ふゆの うち どの きせつ でしょうか？

—そう おもったのは なぜですか？

※おかあさんと こどもは どんな ことを はなしているでしょう？

—ともだちと いろいろ おしゃべりしてごらん。

文中に「むかしむかし…」や「…ておりました」などの語り口調や言い回しを意識的に用いた。それは、「低学年では、まず、読み聞かせを聞くことで、伝統的な言語文化に触れることの楽しさを実感できるようにすることが大切」（指導要領解説）で、「話の面白さに加え、独特の語り口調や言い回しなどにも気付き親しみを感じていくことを重視する」（同）ためである。

また「はなしあってみよう」という項目を特に設けた。それは、「読み聞かせを聞いたり、互いに発表し合ったりする」（指導要領解説）活動を活性化するためである。幼児・児童の実態に応じて用いるならば、「見る・気付く→自分の気付きをみんなに話す→友達の気付きを聞く→友達の話に導かれて再び見る」という活動が活性化するだろう⁴⁷⁾。

実践の場では、この第一場面（巻一・第二紙右半）を提示しつつ（提示の仕方は任意である。スキャナーでPC上に取り込んだものをプロジェクター経由

でスクリーンに投影するのがもっとも簡便である), 上述のように構成した詞書によって「読み聞かせ」を行う。拡大提示した図像の, 色彩の豊かさと描写の細密とが幼児・児童の目を喜ばせるだろう。また「拡大」によって, 様々な新しい気付きももたらされるかもしれない。

【第二場面／巻一・第二紙（左半）～第三紙（右端）の読み解き】

第一場面左の楓樹松樹を区切りとして第二場面となる（図版2）。物語の主人公たちが登場する大切な場面である。画中詞に「をしむはりをこひたまふところ」とある。



<図版2>

場面中央, 二人の男性が対座する。左手に釣針を持つ右方の人物が兄尊, 左方の人物が弟宮である。ちなみに巻頭詞書は「(欠文) おはし, あにおと、いますかりけり。あにのみこは, つりをしてよのなかをすくし, おと、のみやは, することもなくてなむすくしける」と言う（句読点は私に付した, 以下同）。

右方・顎髭を蓄えた兄尊は胡座をかいて座る。白の単の上に小袖を重ね, 奴袴を着る。頭に立烏帽子を着ける。いかにも「普段着でゆったり構えている」という体である。その左手には釣針を握っている。背後の曲物の蓋付き桶から

取り出した物ということか。

左方・弟宮は狩衣に奴袴を着る。頭には兄と同じく立烏帽子を着ける。いかにも「来訪者」の体である。その左手は掌を差し出し、右手は兄尊方を指さす。立て膝でにじり寄りつつ、いかにも「強いて請おう」という体である。

その点、「をしむはりをこひたまふところ」と言う画中詞や、「あにのつるはりをしはしかるに、いみしう(欠文)せめてかりければ(後略)」と言う巻頭詞書によく照応している。

両人が対面する建物は兄尊の住居である。簀子縁を支える束は特に礎石を構えるほどのものではなく、また屋根も板葺きであるということから、いかにも「簡素」という風である。が一方で、板敷きの間の奥には畳も設えられ、また縁長押や面取り柱も美しく作られていることから、けっして「貧相」という風ではない。落葉した桜樹(後続の画面では満開の花が描かれる)の向こう側には泉水も設けられているほどである。よく見れば簀子縁の下には二枚貝の殻も散らばっていて、この建物全体、いかにも「質素ながらも丁寧に住みなした、海辺近くの家」という体である。「あにのみこは、つりをしてよのなかをすくし」と言う巻頭詞書によく照応している。

なお、弟宮について巻頭詞書は、「おとゝのみやは、することもなくてなむすくしける」と言うが、それに照応する描写は場面のなかには見出されない。



さて、主人公たちの名について本絵巻では「兄尊、弟宮」と言うばかりである。記紀等にならって「火照命・火遠理命」と言い換えても悪くないが、幼児・低学年児童のために用いることを思えば、両人の常の暮らしを一言でイメージする「海幸彦・山幸彦」がやはりよい。弟宮について「することもなくてなむすくしける」と言う詞書にこだわる必要も全くない。以上のような観点から次のように再構成(リライト)を行った。

さて、このむらのはずれに、あるきょうだいがくらししておりました。
あにはさかなやかいをとってくらししていたので、なまえをうみさ
ちびこといいました。

おとうとは とりや けものを とって くらしていたので、なまえを やまさちびこと いいました。ふたりは それぞれ しあわせに くらしていました。

あるひ、やまさちびこが うみさちびこの うちに やってきて とつぜん こう いいました。

「わたしは いつも やまばかり。たまには うみにも いきたいな。おにいさん、いちど しごとを とりかえましょう！」

それを きいた うみさちびこは きっぱりと ことわりました。

「ダメダメ、しごとは かえられない。とりかえっこなんて、とんでもない！」

それでも やまさちびこは あきらめようとはしませんでした。

「ねえねえ——」

「ダメダメ——」

「ねえねえ——」

「ダメダメ……」

でも、やまさちびこが さんども よんども いうので、とうとう うみさちびこは、たいせつな つりばりを わたしてしまいました。

<はなしあってみよう>

※みんなは うみの しごとと やまの しごとと どちらが よいですか？

—そう おもったのは なぜですか？

<こえに だしてみよう>

※「とりかえっこ しょう！」と いうのを、むかしの ことばでは「とりかえばや！」と いいます。たとえば「バナナと リンゴ、とりかえばや！」のように つかってごらん。

ここでは「こえにだしてみよう」という項目を特に設けた。この物語の発端となる「仕事（道具）の交換」というモチーフについて、それを「とりかえば

や」という古語表現に集約してみた。幼児・児童の日常生活に多用される「かえっこしよう！」の場面で、この「とりかえばや！」が一種「言葉遊び」のように使われるようになると面白い。単に「読み聞かせを聞くことで、伝統的な言語文化に触れることの楽しさを実感できるようにする」(指導要領解説)ばかりでなく、古語表現それじたいの音や響きを生活の中で実感することを通じて、古典の「独特の語り口調や言い回しなどにも気付き親しみを感じていくこと」(同)が指向されてよい。

【第三場面／巻一・第三紙の読み解き】

この場面には様々の海の幸が具現する。とても豊かで素晴らしい画面である。たとえば、「ここは うみさちびこの うちの うらにわです。たくさんの うみの さちが ありますね。どんな ものがあるか、いえますか？」等の支援を用いて、色彩の豊かさや描写の細やかさに、幼児・児童の目を向けさせたい。

ただし物語の進展じたいに不可欠という場面ではないので、幼児・児童の実態に応じては「読み聞かせ古典絵本」の一頁から省いてもよい。

場面中央、一人の男性が包丁を使って、手にした魚を背開きをしている。彼の前の俎上には先にさばかれた魚が置かれる。折烏帽子に白丁姿、着物の袂を褌掛けにする姿は、いかにも「兄尊の家人」という体である。立て膝をして作業に勤しむ。また足下の魚籠には、これからさばく魚が山盛りである。後方には足高の簀子台が設えられていて、その上にさばき終えた魚が干されている。

簀子台下の曲物桶には水鳥が山と積まれ、その狩りに用いたと思いき狩俣鏃の矢が簀子台上に置かれている。その他にも鱧・權・玉網・吊り篝、魚籠などの道具類も取り揃えられている。画面左方には鼈甲も見えて、画面全体に豊かな海の幸が具現する。

作業に勤しむ家人の側に控える白犬とその子犬は、いかにも「忠実な猟犬」という体である。兄尊の愛玩動物ということでもあろう。この場に相応しいリアリズム表現であるが、「白犬」の説話的なイメージ(忠誠心の象徴、神意の体現者、守護者等)を思えば、「兄尊に海の幸を保証する神意の表れ」等と深読みもできる。特に「狩俣の矢」とともに狩場明神を想起する等のイメージ飛

躍があるかもしれない。もっとも、「おしゃべり」は過ぎてはならない。

場面左端（第三紙末）には垣と折戸がある。垣には網も干してある。これより右側が兄尊邸の内で、門前には松樹楓樹が植えてある。霞の上までもそびえる高い松の梢からは、いまにも「松籟が聞こえてきそう」である。

【第四場面／巻一・第四紙の読み解き】

この画面も美しいものではあるが、物語の進展じたいに不可欠という場面ではないので、幼児・児童のための「読み聞かせ古典絵本」の一頁からは省いてよい。

画面全体には兄尊邸に続く入り江が描かれる。大小の岩と砂浜、打ち寄せる波頭、そして長年の風に傾いだ松樹が見える。兄尊は日頃ここから仕事に赴き、今日はまた弟宮が、無理強いに得た兄尊の釣針を手に、沖に向かって漕ぎ出していったのである。

さて砂浜に蟹が三匹いる。いかにもこの場に相応しい描写ではあるが、読者によっては、単なるリアリズム以上の表現として見えるのかもしれない。

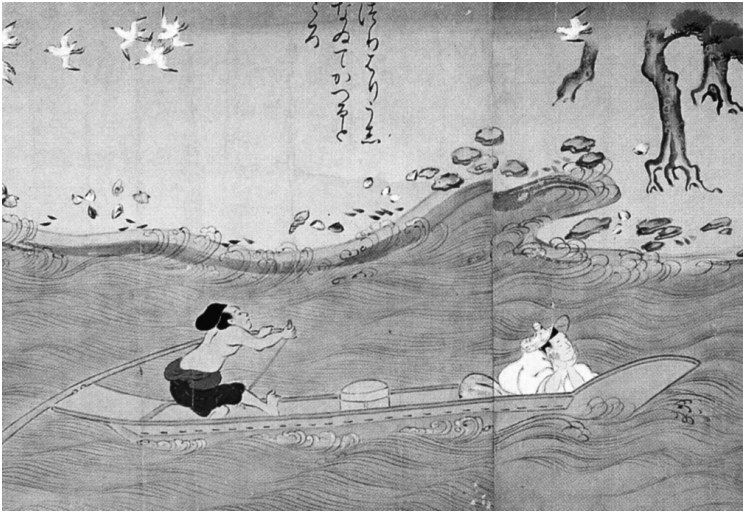
「古語拾遺」の一節に、彦火尊に嫁いだ豊玉姫が彦瀲尊をいよいよ産もうかという折りのこととして次のように記すのである——海浜に立てた産屋の管理を任された天忍人命が、箒を作って蟹を掃らった。以来、舗設を掌ることをもって職とし、蟹守と名乗るようになった旨——。

「砂浜に遊ぶ蟹」の図像から「蟹守」の話を思い出す人にとっては、蟹は単なる蟹にあらず、これから起こる物語の予言を匂わすメッセンジャーとして、ポンと膝を打ち「したり顔」に笑むことを許す「遊び」である。むろん、ここで幼児・児童に語り聞かせる話ではない。

【第五場面／巻一・第四紙（左端）～第五紙（右半）の読み解き】

第四場面左の大岩を区切りとして第五場面となる（図版3）。物語が大きく変化する重要場面である。画中詞に「つりはりうしなるてかへるところ」とある。

場面中央、一艘の小舟が画面右方に向かって進む。左方への展開がおよそ絵



<図版3>

巻の通常であるとするれば、これは「破格」の描写である。本絵巻でも、この巻一・第五紙と巻三・第三紙との二場面にしか用いられない。いかにも「ただならぬ事態が生じた」という風である。

船尾に一人の男性。頭に菱烏帽子を着けていて兄尊の家人と思しい。彼は着物を両肌脱ぎにし、足も大きく踏ん張って艫を操っている。いかにも「懸命に漕いでいる」という体である。釣針を失い、慌てて主家へ戻るのである。

船首にも男性。白の単に奴袴を着し、頭には綾藺笠を着ける。彼は頬杖をついている。いかにも「悩ましげ」な風である。その仕草は、不安や悩みにとらわれた人物の様として古絵巻等によく見出される。今日的なポーズとしても同様の意味を帯びるところである。その様子は画中詞や巻頭詞書によく照応している。すなわち、弟宮は「つりはりうしなる」(画中詞)て、「いかにせむとおもひわひ」(巻頭詞書)、どのように「あにのみこにこのよしをかたる」(巻頭詞書)べきか、悩み憂いているのである。

上空には千鳥が群れ飛ぶ。人麻呂歌「近江の海夕波千鳥汝が鳴けば心もののににしへ思ほゆ」等を思い出さずとも、辺り一帯は、いかにも「日も傾き、なにとなくもの寂しい」という風を帯びているのである。

船上に残されたのは、しまうべき釣針を失って空しくなった、曲物の蓋付き桶ばかりである。



この第五場面に対応して踏まえるべき詞書は下記のごとくである。実際には、むしろ次の第六場面に多く関わる文章であるが、「異時同図」を用いた両場面は時間的には転倒しているので、その再構成に際しては、やはりすべてが必要となる。

つりはりをもちてうみにいて、つりをするほとに、おほいなるいをいきて、つりはりをくふ。(欠文)のを、を、あらいひきければたえて、はりをく、みなから、いをはおきへいぬ。いかにせむとおもひわひて、あにのみこにこのよしをかたるに、あにのみこ、おほきにはらたちて、おほいなるいを、つるときに、はりののを、ゆるして、いをにまかせてゆけは、おのつからつるものなり。そのつりののを、あらいひかむには、いか、たへぬやうあらむ。このつりはり、たち所にえさせよ。ことつりはりのよからむ(欠文)た、そのつりはりをえんと、たちまちにせむ。

以上のような画註と詞書等を踏まえて、次のように再構成してみた。ここでは仕草に注目しながら話し合う活動や、古文(人麻呂歌)の音読の項目を設けた。発展的な要素として幼児・児童の実態に応じて用いるならば、いっそう豊かな学習が期待される。

つりばりを かしてもらった やまさちびこは ふねに のって げんきに うみに でていきました。

しかし——そのひの ゆうがた、 やまさちびこは とても こまった ようすで かえてきたのでした。どうしたのでしょうか？

じつは——やまさちびこは とても おおきな さかなを つりあげようとしたのでした。でも、あと ひといきという ときに、 つりざおを あんまり つよく ひっぱったので、 とうとう いとが きれてしまったのでした。

そして——さかなは つりばりを くわえたまま、 ふかい ふかい うみの そこへ にげていったのでした。

そう——やまさちびこは、うみさちびこに かしてもらった たいせつな つりばりを、なくしてしまったのです。

<はなしあってみよう>

※やまさちびこの ポーズを まねしてみよう。そういう ポーズを している ひとを みたことが ありますか？

—にんげんの いろいろな ポーズの いみを かんがえてみよう。

<こえに だしてみよう>

※ばめんの うえの ほうに「ちどり」という とりが とんでいます。

むかしの ひと、ゆうがた、はまべでなく ちどりの こえを きいていると、なんだか さびしいような きもちに なったんだって。

こんな わかがあるよ。おんどくしてごらん。

「おうみのうみ ゆうなみ ちどり なが なけば ころも しのに いにしえ おもほゆ」(かきのもとの ひとまろの うた)

【第六場面／巻一・第五紙（左半）の読み解き】

第五場面とは「異時同図」となる。すなわち「頬杖をつく弟宮を乗せ、大急ぎで兄尊のもとへ戻る小舟」図の「謎解き」がこの場面である。画中詞に「つりのを、ひき きれるところ」と言う。

躍動感溢れる素晴らしい描写ではあるが、前場面と時間的に前後して、話の内容としては先に触れたところである。物語の進展のために不可欠ということもなく、幼児・児童のための「読み聞かせ古典絵本」の一頁としては省いてもよい。

場面中央、一艘の小舟が画面左方に向かって進む。第六紙に描かれる大魚を追っているのである。

船尾で櫂を操るのは兄尊の家人。服装等は前場面と同じだが、ここは普通に着なしている。船首で釣竿を引くのが弟宮。服装はやはり前場面と同じだが、ここは片肌脱ぎである。大きく足を踏ん張り肩肘を突っ張って、いかにも「大

魚と格闘している」という体である。ちなみに「肩肘を張る」の仕草は、格闘や闘争に興奮し熱中している人物の様として古絵巻等によく見出される。今日的な慣用句としても同様の意味を表す。また家人の方の「掌を翳す」の仕草は、今日では「遠望する」のポーズであることが多いが、古絵巻類には、火事や喧嘩等の闘擾を野次馬見物しに急ぐ人物の様としてよく見出される。この家人、弟宮の悪戦苦闘を野次馬よろしくワクワク見つめているのである。

第六紙（右端）には、釣針をくわえ込んだ大魚が、両目をむきだし鰭を真っ赤に怒らせて、海上に浮かび沈みする。その口元から釣竿へ一筋の糸が繋がる。が、その糸はよく見ると激しく振れて、今しもぶつつりと切れたのである。まさしく画中詞に言う「つりのを、ひき きれるところ」の一瞬である。

【第七場面／巻一・第六紙の読み解き】

波打ち寄せる大岩を区切りとして場面は大きく転じ、再び浜辺の景となる（図版4）。画中詞に「はりうしなひてうらになけきありきたまふところ」とある。



<図版4>

場面中央、二人の男性が向き合う。

まず右方が弟宮（この画面に対応する詞書では「弟尊」と呼ぶ）である。先

ほどまでの船上の姿から変わって、狩衣に奴袴を着し、頭には立烏帽子を着ける。それは第二場面で彼が身に着けていた服であるから、いったん兄尊の家へ帰り、そこで着替えたのである。その折り、弟宮は兄尊からずいぶん叱られたのである。巻頭詞書は「(針を失った) よしをかたるに、あにのみこ、おほきにはらたちて (論者による中略)、このつりはり、たち所にえさせよ。ことつりはりのよからむ (欠文) たゝ、そのつりはりをえんと、たちまちにせむ」と言う。

その後、針を返すすべを考えめぐねて、弟宮は海浜を長く彷徨したのである。彼の袴の裾はたくし上げられていて、いかにも「波打ち際を歩いてきた」という体である。今また彼は腕を組み、右手を頬に当てる。いかにも「いまだ悩みは解決しない」という風——第五場面と同様である。

それらの点、「はりうしなひてうらになけきありきたまふところ」と言う画中詞や、「をとゝのみこ、しわひてうみのつらにゆきて、なくゝなけきありくほとに、あさきか (欠文) きたるおきな、あしかをになひてきてたり」と言う巻頭詞書によく照応している。

左方は、額や目尻に刻まれた深い皺や、右手で杖を突きつつ歩んできたことなどから、それなりに高齢の人物——翁と見える。その翁は浅黄色の直垂を着し、頭に菱烏帽子を着ける。いかにも「凡下」という体である。左肩に担った棒の先には簀を下げているが、その道具立ても凡下の持ち物に似つかわしい。この凡下の翁の正体は、弟宮にとって、また読者にとっても、今のところ「謎」である。巻頭詞書も「あさきか (欠文) きたるおきな、あしかをになひてきてたり」と言うばかりである。むろん往時の読者たちは、この翁こそ身を褻した神仏であり、悩み苦しむ弟宮を必ず救済するだろうと予感したに違いない。



以上のような画註と詞書等を踏まえて、次のように再構成してみた。文中に用いた「ごひゃっこのつりばり・せんこのつりばり」とは、「古事記」の表現を踏まえたものである。詞書等には見られないが、いかにも神話的・伝承的な言い回しとして印象的であり、読み聞かせを聞く幼児・児童を喜ばせるだろう。

また同様の視点から、「古事記」に見える呪詞を音読する項目を設けた。言

葉遊びのような「おまじない」の音や響きを楽しむことは、古典の「独特の語り口調や言い回しなどにも気付き親しみを感じていく」（指導要領解説）ためには格好の契機である。発展的な要素として幼児・児童の実態に応じて用いるならば、いっそう豊かな学習が期待される。

やまさちびこは、しょんぼりと かえってきました。そんな おとうこのようすに きづかないまま、うみさちびこは いいました。

「さあ、はりを かえしておくれ——」

やまさちびこは はりを なくしてしまった ことを しょうじきにはなしました。

でも、うみさちびこは どうしても かえせと 言って ききません。しかたなく、やまさちびこは じぶんの たいせつな つるぎを とかし、ごひゃっこの つりばりをつくって かえそうとしました。

それでも うみさちびこは ゆるしてくれませぬ。せんこの つりばりをつくって かえそうとしても、うみさちびこは けっして ゆるしてはくれませぬでした。

とうとう やまさちびこは なきだしました。そして、どうしたら よいかわからないまま、あてもなく すなはまを あるきました。あるき つかれた やまさちびこが ふと きがつくと、めの まえに おじいさんが たっていました。

<こえに だしてみよう>

※うみさちびこが「さあ、はりを かえしておくれ」と いった とき、むかしむかしの いいつたえでは、こんな おまじないを となえたそうです。みんなも おまじないらしく、おおきな こえで いてごらん。

「やまさちも、おのが さちさち、うみさちも おのが さちさち。

いまは おのおの さちを かえさむ」

※以下、次稿に続く。

注

- *1 参考文献 1-4, 7, 8, 13, 14, 15, 18, 19, 23, 24, 33 など。
- *2 参考文献 25-32, 34, 35 など。
- *3 参考文献 36。授業実践は、平成 20 年 11 月 11 日(火)、福岡市立三宅小学校において 6 年生各クラスを対象に 4 回(2-5 校時)行った。その折りのリフレクション・シート等に基づいた授業分析は、また別稿で明らかにしたい。
- *4 参考文献 5, 6, 9, 11, 12, 20, 21, 37, 38 など。
- *5 参考文献 10, 22
- *6 図版は参考文献 12 に拠った。
- *7 これらの活動を「認知的実践(対事意識)、実存的実践(対自意識)、社会的実践(対他意識)」を活性化するなどと言っても良い。参考文献 16, 17 など。

参考文献

- (1) A.アレナス(2001)『みる・かんがえる・はなすー鑑賞教育へのヒント』(淡交社, 木下哲夫訳)
- (2) A.アレナス(2005)『M I T E ティーチャーズキット 1 (小学校 3・4 年生)』(淡交社, 木下哲夫訳)
- (3) A.アレナス(2005)『M I T E ティーチャーズキット 2 (小学校 5・6 年生)』(淡交社, 木下哲夫訳)
- (4) A.アレナス(2005)『M I T E ティーチャーズキット 3 (中学生)』(淡交社, 木下哲夫訳)
- (5) 稲本万里子(2003)「描かれた出産ー『彦火々出見尊絵巻』の制作意図を読み解く」(服藤早苗, 小嶋菜温子(編)『生育儀礼の歴史と文化ー子どもとジェンダー』森話社)
- (6) 稲本万里子(2007)「描かれた結婚ー源氏物語絵巻 彦火々出見尊絵巻を中心に」(小嶋菜温子(編)『平安文学と隣接諸学 3 王朝文学と通過儀礼』竹林舎)
- (7) 上野行一(2000)「アメリカ・アレナスの鑑賞教育 日本におけるギャラリー・トークとレクチャーの分析を中心に」(『大学美術教育学会誌』第 32 号)
- (8) 上野行一(2001)『まなざしの共有ーアメリカ・アレナスの鑑賞教育に学ぶー』(淡交社)
- (9) 大林三千代(1975)『『すみよしえんき』における彦火々出見尊の説話について』(『国文研究』4)
- (10) 片山清司(2006)『玉井 海幸彦と山幸彦 能の絵本』(BL出版, 白石皓大絵)
- (11) 小松茂美(1979)『日本絵巻大成(22)彦火々出見尊絵巻・浦島明神縁起』(中央公論新社)
- (12) 小松茂美(1992)『続日本の絵巻(19)彦火々出見尊絵巻 浦島明神縁起』(中央公論新社)
- (13) 三森ゆりか(1998)「ドイツの言語技術教育⑦討論の授業<絵の分析>」(言語技術

教育7)

- (14) 三森ゆりか (2002)『絵本で育てる情報分析力ー論理的に考える力を引き出すー』(一声社)
- (15) 全国大学国語教育学会編 (1987)「国語教育のための『映像』の位置」(「国語科教育」第35集)
- (16) 高橋俊三 (1993)『対話能力を磨くー話し言葉の授業改革』(明治図書出版)
- (17) 高橋俊三 (2000)「話し合うことの授業づくり」(明治図書出版「教育科学 国語教育」No.587)
- (18) 丹青総合研究所文化空間研究部 (1987)『ミュージアム ワーク・シート 博物館・美術館の教育プログラム』
- (19) DOME 編集室 (1999)「川村記念美術館『なぜ、これがアートなの?』展が仕掛けたもの」(「ミュージアムマガジン ドーム」42号)
- (20) 永井久美子 (2001)「弟の王権ー『彦火々出見尊絵巻』制作背景論おぼえがき」(「比較文学・文化論集」18)
- (21) 中根千絵 (2004)「院政期文学に現れる老賢者」(「アジア遊学」68)
- (22) 西本鶏介 (2004)『海幸彦山幸彦 日本の物語絵本』(ポプラ社, 藤川秀之絵)
- (23) 林寿美ほか (1998)『なぜ、これがアートなの?展 鑑賞教育の手引き』(川村記念美術館ほか)
- (24) 古田雅憲ほか (2001)「国語科教育における『絵解き』の意義と指導ーさし絵を読む授業の取り組みー」(「語学と文学」37号)
- (25) 古田雅憲 (2002)「新田文庫蔵 百鬼夜行絵巻について」群馬大学図書館報 No.286 (群馬大学附属図書館)
- (26) 古田雅憲 (2002)『『信貴山縁起絵巻・尼君巻』授業化の構想ー絵巻を通じて古典に親しむー」(「語学と文学」38号)
- (27) 古田雅憲 (2003)「<絵解き>教材のねらいと特徴」(「月刊国語教育」2003.4月号)
- (28) 古田雅憲 (2003)「<絵を読む>から<古文を読む>へ」(「月刊国語教育」2003.5月号)
- (29) 古田雅憲 (2004)「新田岩松家旧蔵『百鬼夜行絵巻粉本』についてー猫絵の殿様の画業を理解するために」(「語学と文学」40号)
- (30) 古田雅憲 (2004)「附属図書館の新しい取り組みー特別企画展・親子で楽しむ猫絵展に寄せて」(LINE 群馬大学図書館報 No.291, 2004.9)
- (31) 古田雅憲 (2005)『『林原本平家物語絵巻・殿上閣討事』授業化の構想』(「群馬大学教育実践研究」22号)
- (32) 古田雅憲 (2005)「企画展『第二回・親子で楽しむ猫絵展ー<故事人物画と物語絵>編』に寄せてー」(LINE 群馬大学図書館報 No.293, 2005.10)
- (33) 古田雅憲 (2006)「ビジュアル・シンキングの国語教育への援用について」(「西南学院大学人間科学論集」2巻1号)

- ③4 古田雅憲 (2007) 「幼児教育における古典絵画の援用について－群大図書館蔵『新田岩松家旧蔵粉本』の学習材化－」(『語学と文学』43号)
- ③5 古田雅憲 (2007) 「映像メディアを援用した『扇の的』の授業提案～幼児・児童のための古典教育を展望しながら～」(『西南学院大学人間科学論集』3巻1号)
- ③6 古田雅憲 (2008) 「新指導要領に準拠する古典教材の構想～高学年児童のための『源氏物語』の学習～」(『西南学院大学人間科学論集』4巻2号)
- ③7 むしゃこうじみのる (1970) 「『彦火々出見尊絵』について」(『日本文学』19-7)
- ③8 山内英男 (1974) 「『彦火々出見尊絵』研究序説」(『東洋大学大学院紀要』10)

西南学院大学人間科学部児童教育学科